

〈研究ノート〉

## 美人の効能

——井上章一「美人論」を手がかりに

本稿は筆者と筆者を指導教官とする長谷川伸子（九州大学経済学部大学院学生）の対談の形態を取っているが、この会話自体は現実の会話をかなり修正している。これは、現実の会話をそのまま収録したのでは筆者のフェミニズムに対する知識の不足からくる確認や説明が膨大になるためであり、長谷川伸子の多大な協力を得ている。さらに、次の方々の接触と情報提供によって成立しており、各位に感謝したい。日本文化研究センター助教・井上章一、長崎大学教育学部助教（現福岡市市民局女性部部长）・植木とみ子、徳本サダ子「博多ミズの会」会長および理事の方々、九州大学経済学部助教・関源太郎。また、ゴッフマンについては、大阪大学教養部教授・大村英昭に多くを教えられている。

### 一 井上章一「美人論」

日置 井上章ちゃんの美人論、読み終わったよ。

長谷川 そうですか。私は旅行準備で読めなかったんですが、どうでした。

日置 正直言ってこのテーマならもっとおもしろくてもよかったんじゃないかという気がするね。井上章一本人と話している内容の方がだいぶ面白し、いささか面喰いにこだわりすぎている気がする。昨日長谷川さんがいていたフェミニストの井上批判で、『美人論』は全編『俺は男だ』という雄たけびだというのがあるのも解らないでもないのは、美人≠不美人の区分を直接論じずに、美人の社会的な位置付けを論じるというスタンスが、女性の目には傍観者が美人認定の結果にしか関心を持っていないように見えるのだろうね。

長谷川 要するに社会が美人と認定して以降を問題として見るわけですね。

日置 美人の社会的機能を問題とすることと、それと具体的な美人がどのように扱われるかということはまったく違うこと

日置弘一郎  
長谷川伸子

だからね。確かに美人の定義が時代によって異なっていて、江戸時代や明治時代の美人のイメージが非常に明確であるのに対して、現在は美人を非常に広く考えていることは間違いないけれども、どのような意味で美人なのかを明確にせずに機能が共通すると考えることはかなり危険ではあるね。論旨としては、まず、明治期の社会変動でかなり女性の扱いが変わったという事実を指摘し、評価をしている。例えば、明治の元勳が花柳界の女性を正妻にしたことに見られるように、身分社会からの移行期においては、女性は容貌と社交性で評価されていたという点と、それに対応して美人排斥論が現れた過程を述べている。美人は顔は整っているかも知れないが、心は警戒すべきだし、醜女はその逆に心は美しいという議論がこの時期の美人論だということだ。

長谷川 随分ですね。

日置 江戸時代が身分社会であることは問題ないとしても、明治時代をどのように考えるかということも女性論の立場から検討する必要があるだろうね。明治の四民平等、新たな華族制度によって江戸期の封建的とされる家柄が改変される過程で、文字どおり奥に囲われていた妻Ⅱ奥様が表に出てきたときに、容貌と社交性において花柳界の女性が高い評価を受けたということだろう。江戸の身分とは異なる新たな身分制度が成立するときに、女性の容貌が大きな要素として考えられていたことは注目すべきだろう。これを背景として美人罪悪論・美人排斥論

が出てきたというわけだ。

長谷川 身分の解体と女性の容貌がそんなに簡単に結びつくんですか。それじゃ、男性の身分が解体して、女性に美人という疑似階級が成立したとでもいうんですか。

日置 成立すべきだという議論があったようだね。男性の側は身分制度がはずれて、学校制度によって能力主義による社会進出が可能になったのに対応して、女性にも社会移動のチャンスを与えるべきだ、そのために美人度の国家認定をすべきであるという議論もあったそうだ。つまり、身分に代わる新しい女性の評価基準として美人Ⅱ不美人という区分が提唱されたといっただけだろうね。

長谷川 それじゃ、まったく男の都合で身分を構成するんじゃないやありませんか。女性は容貌だけが判断基準だというわけですね。

日置 明治初年というのは、女性の社会的地位が日本史のなかでももっとも低い時代だろうから、女性の評価基準を容貌に限定していることで女性をおとしめようというつもりじゃなくて、女性に対して自分の能力(?)で社会的上昇の機会を与えることが恩恵であると考えていたわけだろうね。この状態が、美人であることは罪悪であるという論調を生み出していたわけだけれど、それがある時点から美人を評価する側の男性が悪い、要するに面喰いはけしからんという論調に転換することが指摘されている。この転換は、両大戦間におきたとされていて、美

人が排斥されるべきであるとする態度が、次第に美人にも価値を置くようになってきて、美人を排斥するのではなく美人に価値を置くとともに、美人の範囲を拡大してきた。つまり、あなたも美人、あなたも、あなたもというように美人を乱発することでエリートとしての美人から普通人としての美人に移行したというのは井上『美人論』のかなり乱暴な要約だけれども、表現としてはエリートがキーワードになっていいと思う。

**長谷川** 美人とエリートが等価であるのは明治以来変わっていないんじゃないんですか。要するに美人は特権っていうわけでしょう。

**日置** そのこと自体はね。でも、エリートの意味するものやその希少性は明治時代と現在では大きく変わっていて、コーンハウザーの言う大衆社会におけるエリートに置き換えられているとってよい。日本はエリートへの接近可能性が非常に低い社会から、きわめて高い社会に変化している。これと対応するように、かつては美人というのは隔絶した存在であったのに、今では手の届く範囲にけっこう美人がいるということになり、お手軽に美人と交際したり、あるいは自分自身でも美人気分が味わえますよといった状況が現れてきた。すると美人排斥論は実状にそぐわなくなる。女性の評価基準が容貌だけではなく、職業上の能力なども含めて考えられるようになるのと、容貌だけにとらわれる男が悪いということになるのだろうか。

## 二 記号としての美人

**日置** ここで注意しなければならないのは、この『美人論』はむしろシニフィアン（記号表現）としての美人を論じているので、シニフィエ（記号の対象）を論じているのではないという点だ。つまり、美人がどの様な容貌をもっているかとか、美人というレッテルを張られた女性がどのように行動するかを議論するのではなく、美人という記号あるいはレッテルそのものがその社会にどの様に受け入れられているか、あるいは非難されているのかを論じている。美人という記号が時代によってどのように変遷したかを論じて、その社会の特質を解明しようとするという議論が本線で、『美人論』は女性を論じているのではないということになる。

**長谷川** なんだ、それじゃ結局肩すかしなんですか。

**日置** どうもそのようだね。それが何となく中途半端な議論のように思えて、今一つ面白くないという印象を与えるんじゃないかと思う。腰巻きのうたい文句が『面喰いでなぜ悪い』と、これは明確にシニフィエに対する態度を問題としているのに、中身はシニフィアンということに限定して、女性を論じるのはありませんということでは、やや偽ラベルのそしりを免れないかもしれない。

**長谷川** それはフェミニストからの非難を予想した逃げ道づくりじゃないんですか。

日置 多分違うね。女性と話せる機会があれば、彼は決して逃げずに喜んででてくれると思うよ。でも、批判のいくつかは多分不毛の議論に陥らざるをえないことは予想しているだろうね。彼は、特定の女性を美人であると認定できるとか、その美人の意識がどのようなものであったかとかは議論しないわけだけれど、それだけに美人という記号の持つ意味を比較可能にする条件が設定できることになる。

長谷川 フェミニニストは美人という記号の付与そのものを問題にしますよ。美人という認定をすること自体が男性社会の機能で、美人認定された女性になんらかの価値を付与するんですよ。

日置 もちろん資本主義社会における美人という記号を問題にすれば、性の商品化の象徴として考えることができるだろうけど、美人の認定は女性の社会的評価付けというだけではない側面を持っている。

井上章一 自身がいつているわけではないけれども、美人という記号はユング心理学での元型論から理解することもできる。自己の異性像の理想としてのアニメやアニメスを表層の意識として表現するならば美人・美男ということになるだろう。自分の理想の異性像を体現している人間が目前にちらついているけれど、彼もしくは彼女の存在に影響を受けないことはないだろうし、しかもその影響は表層の意識のレベルではなく、直接に制御できない下意識ないし無意識のレベルでの影響であるという

ことになる、それを意識の表層に浮かび上がらすことが美人という記号の付与だとしたら、性の商品化とはまったく無関係に美人記号の需要があることになるだろう。

長谷川 先生、美人・美男という言い方はおかしいんじゃないですね。美男に対応するのは美女であって、美人を女性に限定する必要はないはずですよ。美人に女性だけを対応させるのは、男性社会での言い方で、美人記号というのは女性だけを指すのか、男性も含むのかはつきりすべきですよ。

日置 なるほど。ご指摘ごもっともで、井上『美人論』に引きずられて、美人を女性の表現として扱ってきたけれども、ユングのレベルで考えるならば、男女双方を形容するといった方が正確だろうね。長谷川さんの関心は、男社会における女性の扱いとしての美人記号の扱いにあるわけだろうし、ぼくは美人記号が男女同様に機能するという一般論を考えた上で、男女が非対称的であるという議論を展開したいわけだから、記号としての美人は男女双方に共通するところあえず考えておこう。女性に限定して論じる場合には美女という語を使い美女記号として論じることにする。

話を戻して、美人記号の社会的な扱われ方は、その社会におけるアニメ・アニメスの表出がどのように扱われるかを示していると考えることができる。下意識レベルでの欲望をできるだけ表出しないこと、つまり、つましやかに自分が欲望を持っているというポーズを示すことが美德であるとする社会と、

欲望の表出を許す社会の違いを美人という記号の扱い方によって示すことはかなり意味があることだといえるだろう。性欲の表出を禁止するような文化のもとでは、その代償として美人崇拜（古代ギリシアの美少年趣味を例とするような美男崇拜を含めて）が発生することは知られているけれども、美人という記号がどのように扱われるかについての議論はこれまでにないように思う。その意味では、記号のレベルだけで美人を考えましようという視点は十分尊重されてよいし、美人の容貌にばかり焦点をあてていたこれまでの美人論に比べると、記号としての美人を対象にしようとする議論ははるかに洗練されているとってよいだろう。もっとも、表層での美人の評価が深層では下意識に根ざしていて、表層では制御できないから責任はとりませんと言ふことになる場合が悪いだろうがね。

**長谷川** 美男崇拜も結局男が崇拜しているという意味では、社会というのは男社会のことですよ。それに、美人という記号の社会性の問題とユングじゃ、問題のすり替えじゃないですか。  
**日置** そうともいえないだろう。ユングはもともと集合的無意識をいつているわけで、そのレベルだと性差は考えにくいし、社会条件の変化で集合的無意識に根ざすアニマやアニムスが変化することを否定しているわけではない。むしろ、ユングの理論を展開してアニマ・アニムスの変化をあとづけることができらば、個人の意識、それも下意識のレベルでの変化と社会の変化が連動することを理論化できるわけだし、社会の変化を

抑圧の程度の変化としてとらえようとするライヒのようなフロイト左派にも共通するロジックということになるだろう。もっとも、女性だけを特別に美人として取り上げるといふ論理は成り立たないだろうけれども、少なくとも、男性と同様に女性の場合もアニマという記号の扱われ方が問題になるといえるだろうね。

例えば、母系制で女性のみ財産権があり、例えば、南インドのようにジェニター（生物学的父親）とペイター（社会的父親）の分離が一般的である社会では、美男記号がどのように扱われているかといったことが問題になるだろうね。

**長谷川** ジェニターとペイターが分離しているというのは、誰が生物学的な父親であっても、特定の男性の子供として扱われるということですか。

**日置** そう。結婚が氏族間の関係であって、特定氏族の結合が社会的に認知されると、遺伝子レベルでの父親が誰であるかは問題でなくなる。ジェニターの選択がかなり自由に行われ、女性が家族制度と基本的には無関係に相手を選択できるという条件の下で美男記号がどのように機能しているかを問題にすることはできるだろう。もっとも、母系制社会で美男論があるかどうかを人類学者が報告してるケースを見たことはないけれども、十分に美男論は現実的な課題じゃないかな。

純粹に記号として考えれば、流行のファジー理論を適用して、「その社会の構成員がアニマもしくはアニムスと認定するメン

パーシブ関数が〇・三以上になる容貌を美女・美男と定義する」と考えるならば、いとまたやすくフェミニズムに非難されない美人の定義ができあがるのではないかね。つまり、その社会の構成員の三割以上が自分の理想の異性のイメージとオーバーラップすると感じるような容貌を美人であると認定するならば、後は手間暇をかけてそのような調査を行えば一応美人の社会調査も可能であると言うことになり、かつそれが商業主義や女性差別と無縁であるということになる。

**長谷川** それは、かなりごまかしですよ。現実には井上さんが美男論を書いていけば承知しますけど。

**日置** もちろん、美男と美女がまったく対称的であるはずはないし、女性がより評価の客体であって、主体ではなかったことは認めるけれども、美人を意識する深層が存在しないとか、表層ですべてが決定されるとかいった議論もナンセンスだと思ふよ。社会不安が大きい社会においては、抑圧に対してどのような代償行動が発生するかを集合的に問題とするような理論は、E・フロム以来ありそうで見あたらない。社会不安・抑圧・美女という三題ばなし風に並べると、マレーネ・ディートリッヒとかマリリン・モンローといった名前がすぐに思い浮かぶけれども、美女を要求するような社会状況での共通性といったものが、昭和初期のモガ（モダンガール）・モボ（モダンボーイ）時代のデカダンスにも見られるとわかっていいだろう。享樂的な文化がもてはやされ、セックスシンボルが意識される時代とい

うのは、日常が不安であるような社会が多いだろうね。

美人を必要とする時代というのは、シンボルとしての美人が必要であることが多く、美人という記号だけではなくその社会のさまざまな不安が象徴される。同じ美人でも、その社会の社会状況を象徴する美人と、単なる美人記号として処理されるようなタイプの美人にわけるとは意味があるかもしれない。特定の時代にしか受け入れられないような美人のタイプがあるのは確かだと思うよ。山口百恵なんかは、沢口靖子と比べると明らかに時代の子という性格が強いんじゃないだろうか。

**長谷川** それは面白いですね。でも、それは美男でもいえるんじゃないですか。

**日置** もちろんいえるだろうが、この点では日本を含めた欧米型先進産業国家が男性社会であることを反映して、男女は対称的ではなくて、美女の方がセックスシンボルとして機能しやすいことは間違いない。また、扱われ方が女性の方がシンボルとしての存在だけが強調されるのに対して、男性は男性社会の中でなんらかのパフォーマンスをとった存在として位置づけられ、容貌だけでシンボルとして機能することが困難だといふような理由付けはできるだろうね。

シニフィエとしての女性を論じることなく、記号のレベルだけで美人を問題にすることは明確な理論対象の設定だけれども、もう少し時間・空間の比較を通して議論を膨らます必要があると思うだね。

### 三 女性論の社会的ニーズ

日置 井上『美人論』は女性論でないことを特徴としているけれども、現在の女性論が全体に方向喪失なんじゃないの。雇用機会均等法が大きなきっかけであつたわけだけど、まず家庭外の労働、つまり経済活動として算定される労働の主体として女性を考えるという理論がある。これは女性労働とか婦人労働という理論領域になるわけなんだけど、女性の社会進出を促進するための理論的根拠を用意するというのがこれまでの女性論での中心的論点だつたように思う。つまり、女性を男性と同等の経済的行為の主体として活動できるための条件整備のための議論だつたわけだ。

ところが経済行為の主体というだけではなくて、家事労働も経済行為であつて、生産的な労働ですよという点にマルフェミ（マルクス主義フェミニズム）の立論の根拠がある。家事労働は価値を生み出さないから生産的労働ではないというのは現在の実感からしても現実的な理論とはいえない一方で、他方では家事労働について経済学ではまともに切り込んで行く理論が用意されていないために、女性論が何をなすべきかについて明確な理論的根拠がえられなくなつていて、新しいパラダイムを用意しなければならぬという状況になつてきている。女性論が女性の社会参加を促進するといった啓蒙的な役割を果たしていた段階から、現在は女性の役割を積極的に提案しなければ

ならないために、理論的に腰を据えた検討が必要になつていくわけだけど、それをどうしても女性が行うべきであるという要請があるのだろうか。もし、そうなら男性は女性の間のコンセンサスが形成されるまで傍観するということになるだろうね。

家事と生産の基本的な関係について理論を用意する必要があるけれども、経済学の範囲で果たしてこの課題が解明できるかはかなり悲観的ではないだろうか。生産と消費という区分を行っている限りでは、家事は生産とは切り離されて、たかだか生産を補完する労働としてしか評価できない。企業が製品を完全にオートメ化していいないのでその部分を補完して家事労働が成立しているとは実際には考えにくいわけだが、生産と消費をくつきりと分けてしまうと、小麦粉の形で買って自分でオープンでパンを焼くのと、全自動パン焼き機で焼く、パン屋でパンを買ってくる、レストランでパンを食べるといったことの区分が全くなく、付加価値に応じて値段が違いますという生産者の側での議論がなされるだけで、家庭が受動的に反応しているとして、家庭が企業の生産物を家庭内で加工して企業の生産の補完をしているとは考えていない。ましてその中には女性の役割を男性と区分して考えるという論拠が成立するはずがない。

よく自身は、経済学ではなく経営学が家庭内での消費を積極的に理論化できるのではないかと思つていて、例えば、スコット・バーンズの家庭株式会社を手がかりとして、家庭を生産の主体として考えることでこれまでの生産と消費の区分を相対化

し、すべて個別の消費に向けての行為と考えることが当然のよう  
に思うけれども、これは経済学とは非常に異質な議論と受け  
取られるようだね。

長谷川 でもスコット・バーンズの議論は、家庭における生  
産が重要だと指摘することで、逆に女性にその重要な家事に専  
念しなさいと奨励しているように読めるから好きじゃないん  
ですよね。

日置 確かにそうだね。家庭が単に消費の場ではなくて、生  
産という創造的な行為を家事という形で行っているといつても  
その主体が女性である必然はないわけだから、家事の重要性を  
説くことは女性の社会進出を否定することではないといつても、  
現実には女性を家庭にとどめることを主張することになるだろ  
うね。ただし、生産と消費という区分を相対化して、生産の専  
門家と消費の専門家を分離することをやめなければならぬとい  
う主張は重要だね。生産と消費を完全に切り離すなかで、生  
産⇨男・消費⇨女という図式が成立していたという側面はある  
だろう。

まして、バタイユの「生産よりも消費の方が人間的行為だ」  
という議論は経済学では受け入れられないだろうけれども、実  
際には消費するために生産をしているという目的手段関係を再  
確認すべきで、生産の絶対量が充足できる社会では、消費のた  
めの生産こそ人間的な行為で、やみくもに生産を優先させるこ  
とは危険だという価値意識が浸透するべきだろう。そのことが

社会全体の枠組みのなかでも承認されるとまったく異質な社会  
科学が可能になる。バタイユのように消費により高い価値をお  
いて、生産を消費に従属させる中で家事という最終消費に直接  
結びつく作業を評価しようとする立場からの女性論は可能では  
ないだろうか。生産行為（経済行為）のみでの女性の役割を考  
えるのが婦人労働論、生産行為という枠組みを相対化して女性  
の役割を考えるのがマルフェミとすると、消費に直結する家事  
を担当する女性の役割を考えるバタフェミ（バタイユ主義フェ  
ミニズム）が現れていいんじゃないかな。もっとも、マルクス  
もバタイユも私生活ではとてもフェミニストとはいえなかつた  
ようだけれどね。

ところで、バタイユの消費の優位という議論をもう少し延長  
すると、環境への廃棄物やエネルギーの交換の水準によって消  
費の水準が決定されるべきで、その消費の水準にまで生産を抑  
制しなければならぬというエコロジストの主張につながって  
いるだろう。とするとエコフェミという立場も可能になる。家  
事労働をどのように生産の理論と接合するかという点に女性の  
役割が深く関わることは確かだね。

長谷川 あら、先生、エコフェミっていうのは青木やよひさ  
んなんかが、もう唱えていますよ。女性差別・エコロジ危機は  
近代主義で「男性原理」が肥大化したことよって引き起こさ  
れたとするもので、「女性原理」を復権して、自然界のエコロ  
ジ・身体のエコロジーを回復させることを志向しているんで

す。

それに、先生のいう範囲だと結局女性が家事を担当するという現実を理論化することになり、家事は女性の役割だということとを前提にしていますか。

**日置** いや、そうじゃなくて家事を理論化しようとする、女性の行為全体と関わらせなければならぬということをお願いしたいんだ。男性の側については、慶幸先生（佐藤一九九〇）が生活者としての男性を問題にしなければならぬということを感じにいつている。男性も女性同様に生活者であるはずだし、それを企業内の生活に埋め込まれた存在としてしか議論しないのはおかしいというわけで、時短（時間短縮）の問題も、生活者としての存在を確保するための要件として考えようと提案している。女性も同様に生活者としての位置づけはその人の社会的活動の全体の中で考えられる必要があるということとを前提において考えることになる。とすると、生活Ⅱ消費Ⅱ生産Ⅱ家庭といった総和としての社会活動の中で、女性がどのように扱われるかという点で、その一部だけを取り出す形の議論ではもはや立ちゆかないということだろう。他方、生産の論理を優先させて、生産を基準に経済活動を考える理論は、もの余りや記号の消費という状況、さらに環境の問題で、これまでの生産の量的拡大を基本とする事ができなくなってきた。このために、生産・企業系Ⅱ消費・家庭系Ⅱ環境・自然系相互での物質やエネルギーの交換の様式を再構築するための理論が必要とされて

いる。手前味噌でいえば、その役割は経済学ではなくて、生活学とか経営学が担っていると考えていいだろう。ポラニーやイリチの議論が具体化するためには女性の役割を明確に意識した理論が必要だろう。

**長谷川** 私はポラニーは大物だと思いますけど、イリチは信用していいんですね。……

#### 四 美人の効用—アイデンティティの確立—

**日置** さて、美人論を拡張して、記号としての美人の扱いから具体的にシニフィエとしての美人を考えてみよう。美人であることの効用として間違いないだろうと思われるのは、自己のアイデンティティに影響するという点だ。これは井上『美人論』でもしばしば問題になっているんだけど明確に取り上げられていないわけではない。つまり、美人であるという自意識が持てるか否かという点で美人であることには意味があるということとは、美人記号の扱われ方の裏返しとして何回も示唆されている。たとえ美人であっても美人として意識するな、美人としての自意識を持つべきではないという議論として現れているのだが、美人が美人であることを意識しないことが果たして美德といえるのだろうか。美人のくせに自分を美人と意識しないというのも結構鼻持ちならないんじゃないかとつい余計な心配をしてしまうんだけど、美人記号の付与がアイデンティティに深く関わることは確かだろうね。

長谷川 確かに容貌が自分を決めるといふ側面はありますね。

日置 井上『美人論』では、美人記号がどのように扱われているかを問題とするけれども、このレベルでの記号の操作とアイデンティティの問題を混同してはいけません。シニフィアンに關係なく、シニフィエのレベルで記号操作がなされるケースが美人論でも問題になっていて、明治時代には衛生美人なる概念が提出され、「臀腰壮大」なる女性が健康美として推賞されたという話がでてくる。もっぱら、産めよ増やせよというイメージの産物であつたらしいけど、それが転化して、不美人記号として機能したという。つまり、生物学的あるいは優生学的体格のみの美人で顔はどうでもよいんだという美人認定から、不美人記号への転化が起こった。この記号の変容は自然発生的なものだったが、それを意図的に行うという記号操作も可能で、特に美人記号を操作することによってシニフィエのアイデンティティを操作することも不可能ではない。シニフィアンの操作でもっとも単純なのは、言い替えただけだ。

長谷川 先生がときどきやっている玉村流でしょ。

日置 そう。玉村豊男が、デブというのは差別用語だから、『体重の不自由な人』と言い替えましょうと茶化しているのを応用すると、金錢感覚の不自由な人（ケチ）とか、都会感覚の不自由な人（イモ）とか相当に楽しめるんだけど、さすがに容貌の不自由な人というのは言つてはならないだろうね。

つまり、こんな風に記号レベルで操作することで、自分に付

与された記号を逆手にとつてアイデンティティを作り替えることは可能だ。“Black is beautiful.”というスローガンも、記号としてのレベルで変化をもたらして、それがシニフィアンにまで及んだケースと考へてよい。このレベルでの記号操作でアイデンティティにまで影響が及ぶこともあるわけで、実質的な特性は変化せずに、その社会的な位置づけだけを変容させることは社会科学でも現象学的社会学などで問題とされている意味変容や価値の共有と絡んで非常に重要なテーマになり得るけど、その格好の題材が美人という記号と考へていい。いわば美人記号のポリティックスが成立するか否かという問題として捉えることができるだろう。

美人であることを意識すれば、強固なアイデンティティができあがるとか、あるいは美人に固有なアイデンティティがあるというわけではないと思うけど、美人であるを意識することはかなりの自信につながることは確かだろう。しかし、美人記号の付与だけで強固な自意識をもたらすことはないんじゃないか。よほどの絶世の美女であっても、美人というだけで社会的に存在が認容されるということはないだろう。

問題は、現在女性が美人という記号を付与されることにそれほど汲々としていないだろうということ、美人という認定を受けることに必死になっていることよりも、不美人であるという記号を付与されることを恐れるという方向の行動が多いのではないかということなんだけど。美人方向への価値付与と、

不美人記号の付与による価値剝奪が対称的ではないとしても、かつての美人排斥論にみられるようにアウトスタンディングな存在として自分が評価されることにはかなりの思い入れや思い切りがなければならぬのに対して、平準化した美人であるという評価をうけられることはさして決断という性格を持たない。自分が社会的に美人であるという存在であることを受け入れることは、現在ではさして真剣な自己確認をとまなわないのに対して、社会的不受容を示唆する不美人記号を受け入れることは大きな抵抗があり、決断を必要とする。このレベルのポリテイクスがかなり利いているんじゃないか。

つまり、美人記号の付与を受けてアイデンティティが確立するよりも、不美人記号を付与されることを恐れるという心情の方が女性の行動を説明しやすいんじゃないか。ゴッフマンがいうような不愉快・マイナスの記号としてのステイグマが不美人、下世話に言えばブスという記号であり、それが付与されることでアイデンティティに深刻な影響を及ぼすことがある。ゴッフマンの説明では、秘匿できないようなステイグマ（身体障害や人工肛門、言語等の機能障害など）の保有者はこれらのステイグマを逆手にとって、むしろそれを表面に強調することによって自己のアイデンティティを守ろうとする傾向があるという。健常者、平均からの乖離がある範囲内であれば嘲笑の対象にすることができ、それが余りに大きく病的であるならば、もはや嘲笑の対象ではなく同情の対象となる。ステイグマは、こ

の同情を逆用することで自分の社会的存在を位置づける。相手に同情される以前にステイグマを強調することで、相手に先行して自分の社会的位置付けを確定させてしまう。画家のロートレックの偽悪などは、傷つきやすい自我を、障害を楯にして守っているという側面を持つ。

長谷川 深刻な話ですね。

日置 ゴッフマンという人は、これまでの社会学者が問題にしなかったことを掘り下げようとする意識の非常に強い人で、action に対する expression という概念を提出している。目的—手段の連鎖としての行動を本音としてとらえ、理論対象としてきたのがこれまでの社会学者だったわけだが、それに対して彼は行動がどのような表現をとるかによって社会的な機能が全く違ってくるだろうというんだ。本音はそのままコミュニケーション可能なもので、社会はその本音によって動いているというこれまでの前提は果たして有効か。これまでコミュニケーションの不全として考えられていた表現の問題は、むしろ社会現象を考える上では、より大きな影響因であるのではないか。機能的に等価であれば、その存在が表現形式が異なっても同様に扱ってきたが、社会現象は果たして表現に関係なく動いてきたのか。

長谷川 わかりました。今日は『美人論』がテーマですから、まあ、それに即して言えば、美人が頼んでも不美人が頼んでも同じ反応が返ってくると思えるのが機能主義で、ゴッフマンは

それが区分されている現実を直視しようというわけですね。

**日置** そういうこと。これまでの社会科学は美人であっても不美人であっても、行動・行為としては等価として扱ってきたわけで、同一の action であれば同一の効果を持つと考えたわけだ。これは日常の経験からはとても受け入れることができない仮定だろう。美人に結婚を迫られるのと、不美人に迫られるのが action のレベルでは等価であるとこれまでの社会科学は考えていたことになる。

このように美人論についてはゴッフマンは二つの側面から問題に関わっているといいだろう。一つは、ステイグマとしての不美人がアイデンティティにどのように関わっているかという問題、もう一つが美人という記号が expression であるという状況。

ステイグマの議論を続けると、かつては美人記号がステイグマとして機能していたのに対して、現在では不美人記号がステイグマとなっていると井上『美人論』を読むことができる。

「美人は呪われている、しかし美人のあなたも心に醜女の心情をいただくことで救われるかもしれない」という明治の頃の論調は、まさしくステイグマとして美人を扱おうとしたわけだし、それが一九二〇年代あたりを境として美人に対する論調が変化したのを、不美人記号がステイグマとして機能してきたと解釈することができる。現実には明治時代にも不美人がステイグマでなかったとは考えにくいけれども、美人の社会的評価の

論調ではステイグマとしての美人が論じられた。

このような美人記号とアイデンティティの問題は、いってみれば自尊心のポリティックスであると考えてよく、アイデンティティの構造に美人記号を動員できることで自己が確立する状況としてとらえることができる。このような、容貌という外的な条件で自己が確立できるといういいかたは、これまで皮相な条件であるとして問題にされていなかったけれども、実際には非常に大きなウェイトを占める条件じゃないだろうか。

**長谷川** でも先生、それは常識というものじゃないですか。先生は思春期のころ自分の容貌のことで悩まなかったんですか。それに良い悪いは別にして、容貌がアイデンティティに関わっているということを前提にして成り立っているのが普通の人間関係ですよ。いくらなんでも髪の毛の薄いおじさんの前で「ハゲだけはがまんできかない」なんていう人いませんからね。

**日置** これはまいったね。今までの学者がいかにか自分の個人的体験を理論の材料としていないかということの反映だと思うけど、個人的な経験をゴッフマンのいう action としてしか理解できず、expression を無視する訓練をおこなうのが近代科学であると言ってもよさそうだね。自分の個人的経験に照らしてみれば歴然としていることを一般論にすることで、ほとんどナンセンスな議論にしているというケースは少なくないんだらうね。

## 五 マイノリティとしての女性

**日置** ところで、話題を転換するというか、そらすつもりもあるんだけど、身体性がアイデンティティに関わるという点を拡張すると、身体能力もアイデンティティの要素であることはほとんど問題なく承認される。足が早い、力が強い、歌がうまいといった能力がアイデンティティの要素であつても誰も文句は言わないけれども、それと同様の水準で容貌が美しいという点には文句がでるということは議論の余地があるんじゃないか。

比較経営という領域を専門の一つにしていることもあつて、在日の韓国人社会とのつきあいはかなりあつた時期があるんだけど、その時聞いた話に、在日の韓国人は子供が学校の成績が良ければ有無をいわずに医学部に進学させて医者にするという傾向があるそうだ。現在は多少条件が変わってきているけれども、当時は外国人が司法試験に合格すると、日本に帰化を要請されていた。司法判断に関与する裁判官が外国籍であつてはならないという制約は世界の多くの国で行われていて、国家主権の成立のためにも合理的な制限だと考えられている。このため、弁護士は問題ないとしても、判事や検事は日本国籍を持つていることが要請されると、司法修習生の期間にどの法律職を選択するか自由選択が確保されているという制度が混乱することを恐れての予防措置として司法修習生すべてを日本国籍にしてしまおうということなんだろうけれども、韓国人社会にとつ

ては、受験そのものを拒否されているような感覚になる。このために、社会的に有効な資格取得としては第一に医師資格であるということになる。理科系の適性があるかどうかに関わらず医者にさせられるというのかなり乱暴な気もするけれども、文科系で可能な資格が公認会計士ぐらいしかなければ、医者に偏重するのもやむをえない。

これと同じ感覚で、在日の子弟は、顔が良ければ女優や俳優にし、力が強ければ相撲を取らせ、野球がうまければプロ野球選手を目指し、歌がうまければ歌手にする。その子が格別の能力をなにも持っていなければ、金儲けを教えるというんだ。つまり、自分の個人的な能力を最大限に發揮することで、自分のキャリア形成をしていくことを目指すということで、これは日本人の通常の就職観に対して非常に対照的であるといえる。日本のキャリア形成のメインの流れは、大学、それも銘柄大学を卒業して、なんらかの組織にはいることで組織内の昇進によってキャリアを形成していくことだろう。この時には、身体能力や個人的資質は副次的に扱われている。個々の身体能力をキャリア形成の基本に置くことをせずに、学歴競争へ参入することを当然としている状況が適切であるかを再評価する必要があるだろう。

日本人のスタンダードなキャリア形成が、組織を媒介としていることが当然で、個人の身体的能力を基準としてキャリアを考えていないという事実は、組織論にとつて深刻な問題を提出

しているといっている。もちろん、日本社会で日本人は企業をはじめとする組織に参入しそのなかでキャリア形成を図っていくことになんの障害もないのに対して、在日の韓国人・朝鮮人は組織への参入から排除されているから、やむを得ず自分の身体能力によってキャリア形成を行っているという側面は間違いない。しかし、自分の身体性を基本として社会に適應していることとするのは、組織への参入を通しての社会適應、自己の社会での発現に比較すると、はるかに自己表現としては素直だし、社会分業は個人の能力を伸長することによって行われてきたことを考えると、在日の人たちの子弟教育が忘れられていた原点であるように思える。組織を通してのキャリア形成に必死になるあまり、自分の個性を伸ばすことを忘れて、組織参入のために学歴取得に血道を挙げるという受験指向に比べればはるかに健全だし、教育者というこちらの立場（あんまり言いたくないんだけど）からは、学歴さえ取得すれば良いという状態よりも、自分の能力特性を社会的な適應のために伸ばして行きたいという学生を引き受けることはやってみたいね。

**長谷川** 身体能力には知能も含まれるんですか。

**日置** 身体的な能力を最大限に活用してのキャリア形成という意味では、知能が容貌や運動能力と同列になっているといっただけでよいだろうね。ただし、ここでの知能は医師資格などの資格を取得する能力というレベルでの知能で、医学部への合格能力であり、試験でよい点を取る能力なんだといっただけでよいだろう。

また、誤解がないようにいっておくと、現在の韓国では学歴社会の性格は非常に強く、学歴取得への圧力は日本以上であることは指摘できる。その意味では、在日のマイノリティという条件が、身体能力によるキャリア形成へと向かわせていることは間違いないだろう。もともと、韓国での組織帰属は学歴によってエリートであることが保証されているとしても、必ずしも恒久的な帰属がなされるわけではなく、スピニアウトへの強い動員がかかるために日本のように組織内でのキャリアだけで完結するわけではない。日本では、大学生などにも特定の企業に入社することがキャリアの完結であるという意識がまだあつて入社さえすれば後は何とかなると思いついでいるケースがみられる。組織帰属が確立すれば、キャリアはそれに付随するのが日本の状況で、この状況では身体能力は副次的にしか扱われない。

身体能力を社会的適應の資源とするという点ではマイノリティも女性も同様で、さらに資格取得がキャリア形成の上で重要だという点も共通するんじゃないかな。マイノリティ一般に共通する社会適應の手段として、身体性を考えると容貌もその中にいれてもいい。

**長谷川** それはおかしいんじゃないですか。それだと在日の人が容貌を資源としてキャリア形成しているという俳優やモデルの場合はわかりますけど、女性一般にまで拡張はできないですよ。容貌がキャリア形成につながることを容認すると、就職

の際に容貌が重要だ（本当に、就職課で女性を指導している大  
学があるんですよ）ということに認めることになりまし、マ  
イノリティが身体性を動員して社会的適応をしなければならな  
いという事実は、それが望ましいという結論にはなりませんよ。

**日置** またしても、一本取られたね。対人関係設定のための  
資源、あるいは社会的にアピールするための手段としては容貌  
は能力同様に資源として機能する点を指摘したかったんだけど  
ね。でも、容貌は努力無しに得られる資源であるということ、  
資源の獲得については他と同一には扱えない。生得の資源とい  
う点での不平等は解消しないから問題なんだろうね。

ただ、マイノリティとしての女性の性格なんだけど、現在の  
状況での女性は、われわれが学生で就職しようとしていた頃と  
は少し状況が異なるように思う。昭和四〇年代の終わり、石油  
危機の時代には女性は現在よりもさらにマイノリティに近い状  
態で、女性の就職にはさほど企業のブランドはきかなかつたよ  
うに思う。つまり、女性にとって有名企業であるとか、人気企  
業であるといった銘柄はほとんど有効ではなく、結婚までの腰  
掛けとしてしか考えられておらず、数年で退職することが期待  
され、また、結婚退職できないということがサンクションとな  
っているという状態だったから、適齢期とされる年齢を越える  
と見栄で退職することが少なくなかった。この時点では、マイ  
ノリティとしての女性が生活の維持のためにあらゆる個人的資  
源を動員すると表現してもかなりのリアリティはあっただろう

ね。

ところが、団塊世代の女性が就職して、適当な年齢の相手が  
見つからず、しかも石油危機のあとで見栄でやめても再就職が  
困難であるという状況のもとでそのままいつづけるしかないとい  
うケースが少なからず起きてきた。このときに、能力のある  
女性は次第に仕事が変わってきて、男性と同一の仕事をかき  
れているにも関わらず、給与は低く昇進もないという状態にお  
かれていた。金融機関で、女性がらみの不祥事が相次いだ昭和  
五〇年代前半はこのような伏線があったといつてよい。滋賀銀  
行や三和銀行での女性行員による経理操作の不正での巨額のご  
まかしは、女性行員を便利に使ってきた銀行に女性が復讐した  
と考えることもできるだろう。

このころの企業の女性の雇用管理は、個別の企業の問題であ  
り、企業全体といった一般性を持つ問題として扱われてこなか  
ったことは明らかで、相次いで不祥事が明確になってはじめて  
女性の雇用が問題として認識されるようになってきた。女性の  
側も、この時点以降、どの企業に就職することが有利かを判断  
して企業の選別が真剣に考えられてきたのではないかと思える。  
この時と現在では、マイノリティグループとしての確立や、情  
報ルートの成立などかなりの条件が異なっていると思うけれど  
も、このあいだでの状況の変化を問題にしている人はあまりい  
ないように思う。事務補助職という女性の職業類型に大きな変  
化が現れて、事務補助職の意味そのものがかなり変質して補助

職という副次的な性格が曖昧になってきたこと、オフィスの情報化がすすんで、OA機器の使用が専門的な職種を発生させない状況での補助職のむしろ中核業務への拡大という性格が生じてきているようにも思えるだけに、この変化を理論的に追求することは重要だと思ふ。

## 六 同性の視線と容貌

**日置** より一般化して、容貌が対人関係における資源としてどのように機能しているか、要するに美人であればどうしてあるいはどの点で得をするのかという点はこれまであまり議論されていない。美人であることを資源として意識するか否か、あるいはそれを対人関係における資源として用いるか否かという点は美人であること以上に重要な分かれ目ではないかと思われる。資源としての容貌が、具体的な利得にどのようなパスで結びつくのかを考えることは必要だろう。逆に、具体的な利得に結びつくからこそ、美人であることが特権的だという批判ややつかみも成立するわけで、ゴッフマンの議論での expression が action を凌駕するということを実際に検証することを可能にするのがこの問題であると考えてよいだろうから、ゴッフマンを実証するという知的関心にこたえらるると思ってもいいだろう。

**長谷川** でも、具体的な利益につながることでなくて、人の関心を引きつけること自体が快感という人もいるでしょう。その場合はアイデンティティの問題として処理するんですか。

ちょっと違う気がしますよ。

**日置** それはそうだね。「もてる」という状態そのものが目的で、具体的な利得はなくても、あるいはなんらかのコストを払ってでももてたいという人は少なくないものね。その場合、利得をもてる状態そのものであるといってもいいわけだけれども、ちやほやされていること自体の快感と、その状態を他者にアピールすることによる快感を区分する必要があるだろうね。自分ももてるという確認を自分だけの範囲で済ませる場合はアイデンティティの問題だけれども、それを他者に確認させるという行為はアイデンティティと関わるとしても、それだけの問題ではないわけだからね。

その場合に他者が同性であるのと異性であるのではかなり条件が違っているんじゃないかな。異性に対して、「自分もてるんだ」とアピールすることは男女の相互作用ゲーム（恋愛ゲーム）の戦術の一環として行われるわけだろう。そうでなければ、それはえらく鼻持ちならない自意識の持ち主だろう。ところが、同性に対するアピールとして自分がもてることを示すのは、それ自体が目的であつてもおかしくない。同性からの嫉妬の視線を感じることを快感といったものが有力な動機になっているということはあり得るだろうね。

**長谷川** 世間では女の方が嫉妬深いなんて言ってますね。私はそう思いませんが、先生からみて男どうしの嫉妬というのはどうですか。

日置 それなりにきびしいんじゃないかな。実際ほくもホストクラブで経験があるんだけどね。

長谷川 えっ。先生ホストをやったことがあるんですか。

日置 いや、そうじゃなくて、知り合いの知り合いがホストクラブの女性経営者でね。一度うちの店に飲みに来ませんかといわれて、男三人で知り合いの女性につれられてのこのこ行ったわけさ。そうすると、その店は女性同伴で無ければ男性は立入禁止という店でね、経営者の同伴者ということでボックスで飲んでいたんだけど、ふとトイレに立ってその帰りに、ホストさん達の視線の鋭さに気づいたというわけだ。経営者と親しげにかつ傍若無人にのんでいる連中はいったい何者だということだろうね。男性の場合、同性の視線にさらされるといふ経験がほとんどないだけに、それが日常的な対人関係といかに異なっているかを思い知らされた気がする。容貌を主体としたゲーム、しかもホストを指名するという形で選択権・主導権が絶対的に相手にゆだねられているというゲームで、いわば容貌に全人格が集約されているかのようなゲームが成立している。ゴッフマンの expression が action に優越するという議論はホストクラブで実感できる。

これに対応するのが、例えばつのだじろうの『銀座花族』という女性漫画で、銀座のクラブホステスがNo.1になるプロセスをテーマにして、風俗情報を女性週刊誌で伝えるというもの。これは大阪芸術大学（現在は龍谷大学）の松谷徳八さんからマ

ーケティングの教材ですよと言われて、読んでみてびっくりした。マーケティング・セグメンテーション（市場分割）、マーケティング・ターゲットの選定、ライフ・サイクルの判断、商品の差別化などマーケティングの基本的な概念がすべてといってよい程含まれている。要するに風俗業についても売るべき品物が自身自身であるという条件でマーケティング論の概念がそのまま妥当していることを認識しなければならぬだろう。自分を売ることと自己表現が実際は、expression というレベルでつながることを考えると、商品としての自己が自我そのものでありうるし、action と expression の通底にとっても、自己を売る技術が相互作用の中できわめて重要な意味をもっているということを示している。

『銀座花族』の中でも、主人公が売るのは性そのものではなく、性を通じての自己表現であるという読み方が可能だろう。同様のことは、別冊宝島『セックスというお仕事』というルポルタージュの中でも確認できる。この特集は、女性がレポートした女性の性の売買というコンセプトで編集されているんだが、性を売る女性を女性の目で評価することによって成功したルポルタージュだという印象を受ける。女性にとって性を売る仕事最後の切り札であるとする意識がもし有るとすると、それは決して受動的な仕事ではなくて、商売として成立するためには職業倫理も有ればテクニクもありますよということを示しているんだね。

つまり、人格や個性を媒介にすることなく性を売るとは、客と売り手の双方が自他共に疎外状況にあることを確認する以外のなにものでもないこと、性を売る現場では人格を経由しない性であるということ自体が一つのメッセージであって、しかもその露骨な表出（つまり、物理的接触だけが目的だろうという態度を示す）はかなりの問題を含んでいることを示している。寺山修司が相当気を入れて取り上げている事例にある殺人事件がある。それは、地方出身の男が東京にできて、娼婦を買う。男は娼婦に「俺を愛しているか」と聞く。何度もしつこく聞くものだから、娼婦は男に合わせて、「愛しているわよ」というと、男は色をなして、「今会ったばかりなのにどうして愛しているなんていうんだ」と、激昂して娼婦を殺してしまう。寺山修司一流の脚色があるかも知れないが、性が愛情表現としてのコミュニケーションの手段であるという側面を考えるならば、即物的な性を承認することはできないが、それを否定することもできないという状況を示しているといつてよいだろう。

性が即物的・生物学的なレベルで扱われる場合には、相互の社会的属性は問題にならず、コミュニケーションとしての意味付与はなされない。異性とコミュニケーションの手段としての性を確保しているという中に、同性に対する優位が成立すると考えるべきではないだろうか。コミュニケーションの手段だけ確保しても、伝えるべきメッセージをもたなければコミュニケーションとしての意味はない。性の売買においても、メッセ

ージの無い性が互いに疎外し合っていることをあからさまにして、性の相手を他者として確認できる手段が相手を殺害するという行為であったことは理解できる。

性について議論すると別に考えなければならぬことが多いから、これ以上議論しないけれども、美人と性が直結しないという点は考慮に値するんじゃないかと思うね。アニメ・アニメムスとしての美人を考えれば、セックスアピールという点での評価は可能だけでも、美人論は直接に性の対象としての美人よりも、*expression* としての美人を中心な対象としていることは明らかだろう。

## 七 コケットリーの復権

**日置** 美人は対人関係における資源に無条件になるわけではないから、この条件が成立する状況を考えることで、美人ゲームといった相互作用の成立を考えることができる。社会的ゲームの概念は、クロジエあたりを標準としていいんだけど、相互作用が明確なルールを持っているという状況として理解できる。

**長谷川** クロジエといえば先生御推奨の美男じゃありません。美男ということとなんか関係あるんですか。

**日置** そんなつもりはないんだけど、クロジエヤトンプソン (J. D. Thompson) は確かに男前だと思うよね。この逆が、バーガー (P. Berger) の『刑事コジャック』のテリー・サバ

ラスを下品にしたような雰囲気、マフィアのチンピラがここまで生き延びてきましたといった顔つきなんだよね。バーガーを翻訳した鎌田彰仁さんに彼の写真を見せたら、「えっ」といって絶句してしまった。あれほど繊細な議論を展開している人がこの容貌であるというのは信じられないといった顔つきの写真で、自己表出としての学問と容貌が整合的なケースと不整合のケースがあり得るということではなく、容貌がプレゼンテーションそのものとして機能していると考えてよいかも知れない。長谷川さんに指摘されたように、容貌がアイデンティティに影響を与えていることは学者の世界でもおおいにありうるし、バーガーほどのミスマッチであれば、相当にインパクトがある。それをどのように相互作用の中で自分の得点としていくかについての議論は必要だろう。

ゲーム状況の中で容貌が資源としてどのような利点を確保するかを、美人の場合に即して論じることが、資源としての美人論ということになる。対人関係において、自分の資源をどのように設定しているかについては、かなり昔に、新入社員に対して「他の新入社員に百字以内で自己紹介して下さい」という調査をして、どのような属性要因が他者に対する自分の資源と認知されているかを調べたことがあるんだけど、出身大学・学部・所属クラブなどの経歴をあげる者、性格や趣味などをあげる者、血液型や出身地などの属性をあげる者など、かなりのバリエーションがあり、それぞれに対人関係を円滑にするため

の資源として意識されていることが示せた。

しかし、それがどのような要因、例えば自分の能力の認知や将来についての明確な見通しとどのように関連するかについては、サンプル数が少なかったこともあって、明確な傾向はつかめなかったが、おそらくは個別の人格が個別の状況と個別の判断で自分の対人関係の資源を決定するので、一人の人間でも状況によって、また、相手によって対人関係の資源は変化するといいてよいだろう。

長谷川 容貌をあげる新入社員はいたんですか。

日置 いなかった。自分が美男子だと表明することは、日本の状況ではほとんど考えられないし、自分が醜男だという表明も自尊心に関わる。けれども、タレントの誰かに似ているというのは結構対人関係での資源になり得ると思うけれども、二〇〇人ばかりの調査では現れなかった。

結局、容貌が対人関係ゲームの資源として有効である条件には、そのゲームがどのような性格のものであるかの了解がゲームのプレイヤー間で一致していることが必要なんだろうね。容貌を考慮の条件にいいとするとゲームと、容貌が資源として有効ではありませんとするゲームに分化していて、例えば、大学入試の際の推薦入学での面接試験などは、容貌が要件として考慮されることをできるだけ回避しようとするゲームのルールを採用しているといえる。

長谷川 本当ですか。面接なんかは美人がもっとも得意とす

る領域じゃないですか。

**日置** 個人的な経験（私立大学での面接試験官）の範囲でいえば、評価基準が不明確である場合には試験官は容貌が選択の条件になっていたと指摘されることをできるだけ避けようとする。なぜ特定の人間を合格にして、他の人間を不合格にしたかという説明が必要な場合には、できるだけ相互主観的に確認できる条件での説明を採用するために、容貌が逆に不利になることもあり得るという気がする。

対人関係ゲームのルールが整備されてくると、公的なゲームであればあるほど容貌は要素から排除されるというたてまえになっている。人事における能力主義は Weber 以来の官僚制の理論において強調されているけれども、そこで容貌がひそかに要素として忍び込んでいるんじゃないかという疑いは十分根拠のあることのような気がする。実際、かなり公的な選抜過程で、能力評価を前提として行われているはずの、企業の大学生の就職選抜が容貌と無関係であるとおもわれないケースが少なくない。もともと、学生の能力の中には、自分の対人関係ゲームの資源としての容貌をどのようにアピールするかも含まれていると考えるならば、アピールしない人間を採用する必然は企業にはないからね。

**長谷川** それでも、結局は容貌で採否が決まるならば、不公平ではありますね。

**日置** 自分の持つ身体的な資源を最大限対人関係に生かすと

いうことが、近代の公正さの価値とどのように調和できるかという点はもっと問題にされる必要があるだろう。それを、ジェンダーの問題に限定するよりも、対人関係ゲームの一般論で考えてみたいとするのは問題のすり替えだろうか。少なくとも美人論の範囲では、対人関係ゲームにおける資源としての容貌というテーマに一般化することが適当のように思う。

**長谷川** そうすると、フェミニストと対決しなくてすみませうしね。

**日置** まあね。

ただし、対人関係ゲームについて、*expression* としての容貌をゲームの資源と考えるならば、ゲーム理論での分析を使えないということも主張したいためでもあるけどね。これまでのゲーム理論ならば、ゲームのペイオフマトリックスの要素として容貌をつけ加えることになるだろうけれども、おそらくゲームの構造や、ゲームのルールの改変まで要求することになるといつてよく、ゲームの理論では扱えないような構造なんだろうね。

対人関係ゲームの中で容貌を資源として用いるという戦略を採用すると、ゲームの構造自体が変化して、さらに、その戦略の採用が相互作用の中で行われるためにゲームで自分が意図しているのと関係なく容貌が要素の中に紛れ込んでくるということが考えられる。

また、二者関係では容貌は要素に入らないのに、容貌を意識

している第三のゲームプレイヤーが現れたとたんにゲームが全く異なった位相を持ち始めるということも経験したことがあるだろう。ある私立大学での経験なんだけれども、非常勤講師として外書講読を教えていて、男子学生の中に薄化粧をしているのがいるんだ。それまでは別に気に止めていなかったのが、化粧をして流し目をされると、気になってその学生を指名しにくくなる。ゲームの位相が先生对学生という枠組みだけではありませんというサインとして化粧を使ったとすると実に効果的で、教室の雰囲気が一変してしまった。

要するに、ゲームの進行につれてゲームのルールが変化してくるために、なんらかの論理が特定のゲームの中で働いていると考えることが困難であるような状況が起きているということを考えなければ対人関係ゲームは解けない。

おそらく、容貌が対人関係ゲームの要素に入りますよというサインがゲームの当事者に了解されている必要があって、そのサインを昔風にコケットリーと呼んでよいように思う（フックス『風俗の歴史』）。

**長谷川** コケットリーって、わざと失神してみせたりというサインでしょう。ビクトリア王朝風の女性蔑視の時代の遺物じゃないですか。

**日置** 自分の魅力についての社会的ルールに即した定型的表現の形式なんだけどね。こういう定型行動をとりますから、こう理解して下さいという相互の了解の下にとられる行動の様式

と考えていい。

**長谷川** つまり、ジェンダーを固定して考えていたわけでしょう。

**日置** ビクトリア王朝のコケットリーはその通りだけれど、ジェンダーを広くとった上で、互いの行動についての表現の形式を定型化しなければコミュニケーションは可能ではないだろうから、容貌についてのコケットリーを復活することを考えることを提案しようとしているんだけど、性役割を固定化せずに魅力を発現する定型行動を考えるのはずいぶん困難には違いない。

さらに、定型行動という中には言語表現を含んでいるだろうから、コケットリーだけではなくて、クリシェ（定型表現）を考える必要もでてくるだろう。相互主観性や解釈コードの問題まで含めると、最近の現象学的社会学の主要な理論領域を総ざらいする必要がありとってよく、对人的魅力という社会心理学のテーマがやたらにむずかしい議論で再構成されることになるだろう。社会科学の中で、相互作用を取り上げているさまざまな領域でも、容貌を相互作用の中で分析することは大変な困難をとまなっていることは予想していたけれども、だんだん問題の構造が明らかになると、なまじな知識量ではとても扱いきれないようだね。それなりの仕込がなければ、美人には手をだすなという教訓程度しか結論はでそうにないね。

参考文献(本文出現順)

- 井上章一 一九九一 「美人論」 リプロポート  
コーンハウザー 「大衆社会の政治」 東京創元社  
ユング・C・G 「人間と象徴」 河出書房新社  
E・リーチ 一九九一 「社会人類学案内」 岩波書店  
バーンズ・S 「家庭株式会社」 プレジデント社  
バタイユ・G 「呪われた部分」 二見書房  
佐藤慶幸 一九九〇 「共生社会の論理と組織」 組織科学  
Vol. 24, No. 4  
ポラニー・K 一九五七 「大転換」 東洋経済  
イリイチ・I 「シャドウ・ワーク」 岩波書店  
ゴッフマン・E 「行為と演技」 敬信書房  
つのだじろう 一九八〇—一九八一 「銀座花族1—5」 主婦  
と生活社  
フックス・E 「風俗の歴史」 角川書店  
井上章一・森岡正博 一九九〇 「売春と臓器移植における交  
換と贈与」 日本研究2号

長谷川 先生、この参考文献だと、井上さんとかわずかの例  
外以外はみんな社会科学のビッグネーム、それも翻訳つきはっ  
かりじゃないですか。こういう参考文献で恥ずかしくないんで  
すか。

日置 もちろん恥ずかしいよ。恥ずかしいから、あらずもが

なの蛇足を付けているわけだね。社会科学の教科書のような参  
考文献ではスタンダードな知的伝統しかフォローできないわけ  
だから、オリジナルな議論が展開できることは期待できない。  
なにがしか、スタンダードではない文献が含まれていなければ  
ならないだろうね。ただし、女性の視点にたつ理論が少なく、  
スタンダードなビッグネームの書物を再検討する作業から始め  
る必要があるということの反映だと考えていいんだろうしね。  
女性と男性を区別して考え出したとたんに、これまでの社会科  
学の常識から疑いが必要ならなければならないために、検討すべきは  
まずビッグネームということになるんじゃないか。

長谷川 それにしては、この論文の形式が、男が教え導いて、  
女がそれをうけたまわるといふのは釈然としないですけどね。

日置 それが問題になるとは思わなかったな。ごく自然に学  
生と指導教官という実態を反映しているつもりだけだね。いつ  
か長谷川さんが、対話の形式でフェミニズムに無理解な年上男  
性を教え導くという論文を書くときには、喜んでお相手をつと  
めさせてもらうという事で勘弁してもらおうかな。

それにしても、対話の形式での論文は、通常の論文では書け  
ない内容まで踏み込んで書けることは印象的だった。問題の所  
在を示して、分析は先送りにしたり、事実を事実として投げ出  
すだけで、その意味付けは読者にゆだねるといったディスクリ  
ブル(表現法・語り口)が可能であることで、随分表現の可能性  
が増大する。性役割と容貌の問題といったテーマのように、議

論が十分に熟していない領域を、試論として扱うためにはこの表現形式は有効だろうね。井上・森岡の「売春と臓器移植における交換と贈与」についての論文も、議論はなされていても十分に理論が解明されていない臓器移植という社会現象を、売春と臓器売買という「身を売る」行為を同列に扱うことでその倫理的意味を考えようという試論だけれども、対話という形式の採用で成功しているといったらよろうね。

長谷川　でも先生。ディスクール重視、expression 重視はわかりますけどね。それは要するに論文を美人化するわけですよ。日置論文の action はなんだったことになりますね。

日置　えっ、うっ、むむっ、んっ。